

「人生最初の1000日」 の栄養を考える

特集にあたって

近年、わが国では少子化が顕著であり、2024年の出生数は70万人割れの公算が大きくなっている。また、高齢出産の増加などの背景により、超・極低出生体重児や早産児が増加している。そのため、児をいかにすくすくと成人期まで成長させ、元気に過ごさせるかということが重要となる。その大切な出発点として、UNICEFやWHOが「人生最初の1000日」というキーワードで、この期間の適切な栄養が将来の健康維持に有用であると提言している。この「人生最初の1000日」は着床から誕生までの270日と、2歳になるまでの700日を合わせた約1000日のことをさしており、その期間の栄養の重要性は、developmental origins of health and disease (DOHaD) やエピジェネティクスという言葉で表現され、注目されている。また、食物アレルギー予防の観点からも出生前後の栄養管理が見直されつつあり、さらに、生活習慣病の予防の観点からも小児期の栄養の重要性が指摘されている。

このように、出生後の小児の栄養管理のみならず、妊娠前や胎児期の栄養状態の改善も重要であることから、わが国では「妊産婦のための食生活指針」が「妊娠前からはじめる妊産婦のための食生活指針」として2021年に改定され、妊娠前から授乳期にかけた適切な栄養摂取の重要性が提言されている。

本特集により、母体と児の栄養管理の最近の潮流を理解し、その重要性を認識していただければと考えている。

日本大学医学部附属板橋病院 小児外科

上原秀一郎